

わらいっていいなあ

—鬼のまんざい—

さく・わきたあゆみ



わーはっははは わーはははっ

かいじょうでは、おきやくさまのわらい声が
ひびきわたっていた。

あかあおきょうだい

ぶたいに立っているのはまんざいコンビの赤青兄弟。

「なんや赤どん。赤い顔してこわい顔してまるで鬼みたい
火の山でもものぼったみたいに顔まっかかやがな」

「何言うてんねん、青どん。わしは、見てのとおり
赤鬼やで。赤いのもこわい顔もうまれつきや。

それにな、火の山のぼったら赤くなるんちゃうで、
まるこげやからまっ黒や。

そーいうおまえもどうみても青鬼やないか」

わーはははははっ

二人がなにかいうたび、わらいがおこった。



体の幅が大きくてまっ赤な顔をした、赤どん。

ほそみでせが高いまっ青な顔をした、青どん。

いしよくなかれらの姿はおとなだけでなく、子どもたちの
あいだでもわだいになっていた。

「もうすぐやな、

てんかけていせん

まんざい天下決定戦。おれ、優勝は

赤青兄弟やと思うんやけど」

「うんうん。僕もそう思う。あの二人の鬼ネタ大すきや。

あんな鬼やったらこわないわ」

赤青兄弟は、かくやできゅけいしていた。

「いやゝ。まんざいってほんまええな。

あのみんなのわらう声きいたか？きもちええわ」

赤どんのことは「、青どんがこたえた。



「ほんまやな、わしら笑いがこんなに

いいもんとは思いませーへんかったな。でも…」

「でも…、なんや」

「ちよっとわしら人間の前にすぎたんちゃうやろか
これ以上ぶたいでたらさすがにばれるで。それに、

大王様にでも見つかったら、地獄ひき戻されて握りつぶされてしまつて」

赤どんは、きよろきよろしながらこたえた。

「しーっ！声がおおきいな。」

分かってる。でも、せっかくここまで来たんや。あっちもどつたら二度とまんざい
きなくなるんや。わし、天下決定戦だけはでてみたいんや。それに、いくら大王様で
もあんだけうじゃうじゃいる鬼の中で二人ぬけたかてわからんやろ」

赤どんと青どんは、まんざいコンビ赤青とは仮の姿、

本当は地獄から人間界にやってきた

ほんものの赤鬼と青鬼だった。



「ばかもん！とっくにわかっておるわ！わしはえんま大王じゃぞ。

ごんやいん へんま

甚六と甚八め地獄に来てまで、いらんこと鬼にぶきこみよって。

まあええ、もう少しだけようすみよか。」

そうつぶやいたのは、地獄から二人のようすを見ていた地獄のえんま大王様だった。

鬼は地獄に来たものたちのあんない役であり、みはり役で罪人をおびやかしこわがらすことがやくめだった。



この度は、ご覧いただき有難うございます。

続きは、製本直送よりオンデマンド製本をご購入ください。